

一體、勤勞は質實剛健な氣風を與へると共に、沒我共同の精神を生ましむるものであらう。しかし此等の精神は、登山に、行軍に、教練に、競技等と養ふ機會に手段は多くあるが、勤勞は何かしら一種の異様なものが感ぜられる。上調子に滑つて行かない。即ち人間に一番大切な觀念を自得せしめるのであらう。質實剛健な氣風は、滅亡ローマ帝國には存在しなかつたであらうし、若しこれがあれば漢・唐・宋・明の倒れるを維持する大柱となつたものと信ぜられる。ドイツは青年にこれを把握せしめて今日の發展を來たしたのである。鎌倉時代を特色づけたものは、武士道に養はれた此の氣風であり、關東の令、山の如しとは、實に此處に俟つたのだ。そして此の精神は上古の社會にも見られる如く國史の底に流れて今日まで國民精神として、その生命を維持して來たのだ。

私は山科方面に行軍した時、百姓の老人が私に、土といふものは有難いものです、かうして働けば作物が出来る、結構なものです、わしは此の田畑から作物が

生れて來ると思つて育て上げてゐます、と言つてゐたが、沒我共同の精神と質實剛健の氣風を養ふ勤勞は、ものを創造するのでなく、生んで行くのであり、出来上がったと思ふ防空壕は生れたのである。最近、古事記の註釋書がよく店頭に置かれてゐるのを見たから、何氣なしに買つて來て讀んだ中に「生む」の精神につき書かれてあり、それを見て此の老人を遙かに尊敬した。實に日本文化は生命文化である。土を相手にする勤勞は、常に人をして報恩感謝の念を湧かし、純情な人を築き上げて行くであらう。民謡はよくこれを語つてゐる。トルストイは、勞働に接觸なき人は恐らくその人の全生活に或種の報を齎らさないであらうと云つてゐる。土を相手にする農業は交換・企業の經濟の如く營利の觀念を起ささず寧ろ自然に接觸して、此の種の勤勞を無視する者の觸れ得ないやうな健全な喜びと苦しさを感じしめ、利己的なことを考へせしめないであらう。このやうにみてくると總べての面からして土を離れた文化は本質的に人間に幸福を與へないと言

ひ得る。
穴堀りと呼ばれた自分は、このやうに身の程を忘れたことを思念しつゝ仕事を續けたのである。

奉 仕 堀 記 隆 靜

七月廿四日。こゝは奥多摩峽谷の中心をなす町で地方の人々は素朴そのもので當に太古の仙境である。吊橋を渡つて胸突く様な坂道を

を登り目的の思源寮に着いた。人里離れた山の中腹に立つた新築間もない寮である。午後三時全員集合、入寮式が行はれ一同文部大臣及び道場長の訓示に感奮する。

七月廿五日。せゝらぎの音と共に眼を醒ます。今日から日課通りに諸行事が行はれる。先づ五時起床、五時三十分點呼續いて山麓の氷川町まで駈足、氷川神社にて木劍體操をやり奥多摩の清流に丸裸になつて禪をして一切の汚れを除く。朝の體操は苦しいけれども楽しみなものである。それは人里離れた山腹から婆娑の風に當るからである。禪の後、身も心も

清々しく山路を寮に歸る。舍前に集合して朝禮を行ふ。國旗掲揚、遙拜、國歌奉唱、道場長訓示、御製奉唱で終るのであるが、御製奉唱の聲は山々の彼方へ木魂して實に嚴肅である。七時になると待望の魚盤が鳴る。皆活々として食堂に入り神拜の後食事を採る。食事は一切無言で食器の音を立てる事すら許されない。全員食べ終つた時に食後の禮を行ひ食器の整頓を濟ませて部屋に歸る。八時より清掃、八時三十分より作業に掛る。今日は木炭用材の伐採作業であつた。手頃な立木を大斧で切るのは愉快だつた。十二時になると炊事當番が山路をふみ分けて辨當を持つて來て呉れる。晝は原則として戸外で食べるのださうだ。澤庵と梅千丈けであるが空腹の爲め實に美味い。十三時より又作業、四時に終了して歸寮——四時三十分夕禮である。君が代の代りに夕禮の折は海ゆかばを齊唱し、大君の御楯とならん事を誓ふ。十七時より一時間で入浴をする。浴場と云つても野戰を偲ばせる様な定員四人の風呂、全員入浴が終る頃は湯なんかないものではない。

今日は午後六時の夕食後、帝國治水協會長殿より訓話あり、一同感激を新にし二十一時より靜座、二十一時半消燈して就寢す。奥多摩は夜は少し寒い様だ。

七月廿六日。今日の作業は他の者は開墾やら伐採をやつて居たが、僕は鋸の柄を作る。木工は十八番なので仲々巧くやれて愉快だつた。午後七時より文部省より來られた視學官兵務局氣付の田村大佐を團んで座談會などあつた。此の座談會で最も深く感じた事は現在の青年が宗教に關してどれ位の關心を持つてゐるかと云ふ事で、我々としては例へば禪宗の碧巖錄などの研究と共に日常の儀式などに就いての氣付かない様な方面も研究して置かなければ鼎の輕重を問はれる様な結果になるのではなからうかと云ふことである。これと共に全國の我々と同じ様な大學高專生が如何に從來の傳統……或は因習……を捨て、新しく出發して居るか今にして我々が覺醒しなければ結局世間をリードすべき我々が却つてリードされるのではなからうか。今日の座談會は非常に有益だつた。

七月三十日。愈々今日は退寮の日である。一週間の色々な思出が懐かしい。歸れる喜びと名残り惜しさが交々至る、午前九時記念撮影を濟まして退寮式を行ひ文部大臣より「よくやつた、今後共頑張り」との御訓示あり、太田場長より「諸君はよくやつた、諸君と別れるのは本當に名残惜しい」と涙ながらに訓示された時は全員涙を流して無言の誓をし、終つて十一時前旅裝を整へて寮を後にした。寮長先生や諸先生、食堂の方々、それに日傭の半島同胞までがハンカチを振りながら見送つて呉れる。寮もだん／＼遠くなり木蔭にかくれた。では思源寮よ左様なら……。

北 邊 尾 隆 偶 立 感 立

あちらから歸つて學生以外の、所謂社會人の凡てはこんな事を平氣で云ふ、うどうせ學生の作業だもの大した事は無かつたんだらう」と。五年七年前の學生がお返し附けた影がそれらの人々から除けられない事は、吾等學生にとつては甚だ迷惑